

## ■エトワールvsザコ姦@時間停止・エリョナ

キュアエトワールは今日も人々を襲う敵と戦っていた！  
だが、今回の敵は今までとは全く特徴が異なっていた。

「くっ！ このっ……あっ！」

(何なのこいつら！ いつものヤツらと違って、一瞬だけ素早くなる……！)

いつも敵は巨大かつ単体であるのに対し、今回は小さな個体が複数出現。  
そして小さいためすばしっこい……だけでなく、時折、一瞬だが視認不能なほど高速で動くのだ。

敵は時間を止める能力を持っている。その影響を受けないために輝木ほまれはプリキュアの素質を持っていたのだが……

今回の敵は今までより力を増しているようで、プリキュアに変身していても極僅かに時間停止の影響を受けるようだ。

そのため、敵が能力を使った瞬間にエトワールの時間が停止し、敵が一瞬だけ超高速で動いたように見えるのだ。

小さな敵……人に触手が生えたような異形がまた瞬間移動でもしたかのような動きを見せ、  
身体能力に長けるエトワールもついに後れを取ってしまう。

(やっぱり……！ こいつら、わたしの時間も少しだけ止められるように……)

「あっ！」

触手が絡み付き、手足を拘束する。

強さはなんということはないが、時間が停まった中での行為は事実上の超高速で、驚愕もあり反応に乱れが生まれる。

その隙に敵が攻撃したのだが……打撃ならともかく、

その動きは肢体を舐めるような愛撫であり、

戦闘中とは思えぬ、なによりエトワールらしからぬ羞恥の含んだ可愛らしい声が出てしまう。

(こいつら、それが狙ってこと?!)

「アンタたちの好きにはさせないっ！」

敵の目的は単純な戦闘での勝利ではなく、エトワールに性的な行為を働くこと、  
女性として辱めることのようなのだ。

歪んだ悪意が垣間見え、更なる義憤に駆られて打撃を返す。

渾身の拳打と蹴撃が敵の数体を吹き飛ばしていく。

だが、相手は複数、しかも相当な大勢だ。

下手をすれば百体近くを相手に、身体能力に優れたエトワールといえど疲労で動きが鈍っていく。

「はぁ……はぁ……っ！ こいつら、手ごわい上に、いくら倒してもキリがない……！」

息を荒げるエトワール。異形たちはその様子を愉快そうに眺めた後、手の平をかざして霧のようなものを放出させた。

「っ！ 何よこ……」

\_\_\_\_\_.....

邪な者の放つ不思議な力……浴びるわけにはいかないと思うが、次の瞬間、また自分以外が超高速——停止した時の中で動き——

\_\_\_\_\_.....

ぎゅむっ！ ぱんっ！ ばちいんっ！

「れ……っ！ あ！ あああっ！」

跳躍して回避しようと思った時には、妖しい霧に包まれていた。そして同時に感じる、胸や臀部、股間への刺激。異形たちは時間を止めた僅かな間に、またもエトワールの女性的な部位に対して愛撫じみた攻撃を行っていたのだ。

時間が止まっている間に起きたことは時間が進んだ瞬間、一気に知覚させられるらしい。

通常では味わうはずのない、同時に複数発生した刺激に悲鳴が上がる。

だが苦悶の理由は単に厭らしい行為や意図を浴びただけではない。

(な……何、これ……?! わたし、触られたの……? じゃあ、何でこんなに身体が熱く……!)

触れられたと思しき刺激。それは霧を浴びる前のものとは全く質が異なっており、

あろうことか快感——性的な高揚を覚えるものであったのだ。

いくら刺激が優しくとも、敵に素早く触れられて快感を得るはずがない。

となれば、霧に何か仕掛け——例えば人間を強制的に発情させるような効果があるに違いない。

「アンタら、どこまで……汚い手」

\_\_\_\_\_.....

ずむんっ♡

「をっ！ こ、このっ！ あっ！」

恨み節を言いかけたところでまた超高速の刺激が奔る。

アスリートとは思えぬほど大きく突った胸を揉まれる感覚に悶えさせられ、

反撃しようとするれば数で押し切られて強引に触れてくる。

このままでは勝てない。それどころか、敵に攻撃されているにも関わらず女として興奮させられてしまう。

エトワールは少し悩んだ後、ここはひとまず撤退することを選択した。

(悔しいけど、敵が多過ぎる……! ここは一旦、隠れ……)

—————  
……………  
ビリイッ！

「きやあつ！ く、くそおつ！」

強引に敵陣を突っ切る中、今度は衣服が攻撃される。  
スカートが引き裂かれて下着が露出してしまい、羞恥に朱くさせられるも  
なんとか逃げ切り、身を隠すことに成功する……。

「はぁ……っ！ まさか、こんな格好になるなんて……っ！」

廃屋に身を潜めるエトワール。  
あられもない姿になった自分を見つめ直し、改めて艶めかしさを自覚させられる。  
元々スタイルがよく、変身後は更に肉感的になって女性らしさが強調された体型は  
綺麗、端麗と言えば聞こえはいいが、やはり男から見れば性的な魅力も溢れるのだろう。  
短い間に何度も攻撃を受けた爆乳と爆尻には未だに刺激の余韻……性の愉悦が残っており、  
むしろ何もせずとも呼吸をおくごとに昂ぶってくる。

(あの霧……どれだけ強力なのよ……！ ……それとも……わたし……)

戦闘中に一切感じなかった性感を与えてくるということは、  
敵が放った霧はそれだけ強い効果を持っているのだろう。  
だが、戦闘から離れても後を引く性感は異常ともいえ、  
ただ霧だけのせいではないのでは……  
つまり、自分の性欲にも原因があるのでは、とさえ思えてくる。

(敵にあんなことされて、悦ぶなんて有り得ない……！ ……でも……)

気味の悪い異形に触れられ、叩かれ、撫でられる。  
それによって得られる屈辱、恥辱……快感に対する意識が頭からふりほどけない。  
強制発情による一時的なものだと理屈では分かっているけども、  
戦闘から離脱して冷静に考えるほど、自分の性欲、強姦願望こそ興奮の原因なのではないかと思ひ込まされて  
しまう。

(っ、そろそろ追い付かれる……！ ダメよ、こんなんじゃ……しっかりしないと！)

悩み終える前に敵陣が追い付いてきた。  
股間……下着は腰布で僅かばかりに隠れるも、羞恥が完全になくなるわけではない。  
紅潮を残して色気を増した貌のまま、エトワールは追ってきた異形たちに向けて正義の視線を突き付ける。

「フレッフレッツ！ ハ————ト……スタ————ツツ！！」

敵が時間を止めるなら、近付かれる前に攻撃すればいい。  
エトワールは星状のエネルギーを束ねた光条を撃ち出し、更に薙ぎ払うことで遠距離から多数の異形たちを弾き飛ばしていく。

敵陣が輝く粒子に包まれ、向かってくる足音が止まって静寂を生む。  
これは効果あり、むしろ敵を全滅させられたのでは、と淡い期待を抱くが……

「……やったの……？ ……………っ！」

その期待は、光を振り払って再び進行してくる異形を見た時に掻き消された。  
敵がまだ多数残っているというだけではない。  
敵の股間部や触手は力強く硬化しており、  
ギラついた視線はエトワールの肉体……こと胸部と股間部に向けられているのだ。  
あけすけな性欲、遠慮のない雄としての暴力的な本能を直視させられ、  
敵をやっつけられたかという正義の期待や希望も忘れるほど  
性の欲求と絶望に包まれたのだ。

「こ、こいつらっ、どこまで……っ！」

いざとなれば、ペニスなど蹴り飛ばしてやればいい。噛みつき、殴り潰してやればいい。  
女性なら誰でも考える、雄の撃退法。  
だが剥き出しの雄棒を見てしまったエトワールの頭には、  
撃退するどころか組み伏せられ、蹂躪させられる予感しかなく……

ばちいっ！

「ああああっ！」

身体が固まった隙に、また触手の一撃を喰らわされる。  
鞭のようにしなる攻撃は的確に爆乳の中心を狙っており、  
いつの間にか充血していた乳首が強く打たれてしまう。  
プリキュアの力が痛みを弱め、その分だけ強い快感を感じさせられる。  
続いて触手が脚、尻と打ち続ける。  
緩い攻めでは反撃されると思ったからか、先程までと違いほぼ通常の攻撃だが、  
それでも今のエトワールにとっては大きな愉悦を生む愛撫となり、  
敵に打たれていながらも身を揉んで情けなく悶えるしかない。

ばちっ！ ばしんっ！ ばちいんっ！

「くうっ！ あ！ この……くふうっ！」

(しっかり、しないと……っ！ こ、こんなことでっ！ 気持ち良くなったりっ！)

ばあんっ♡

「はぎゅううっ♡」

いくら快感や羞恥に襲われるとはいえ、このままでは更に危うい事態になってしまう。  
恥と苦悩を忍んで反撃しなければ……そんな気高い意志を、股間への強打が吹き飛ばした。  
男性と同じく、急所である女性の股間。本来であれば強い苦痛に襲われるはずなのだが……  
秘裂と陰核に帯びた媚熱はそんな衝撃さえも受け入れて快楽に染まっていく。  
急所打撃の痛覚、そしてそれに匹敵するほどの強い性悦は変身ヒロインにとってすら耐え難いものであり、  
エトワールは望まぬ悦びと痛みに苛まれながら、股間を押しえてうずくまってしまう。

「はっ……♡ く♡ ふうう……っ♡」  
(こ♡ こいつらっ♡ 絶対♡ 許さな……)  
ばちんっ♡ ぱあんっ♡  
「んひっ♡ ひ♡ やめ♡ あひいっ♡」

もはや憎悪さえ抱くが、反撃と不屈の決意を嘲笑うように鞭攻撃は続く。  
無様に掲げ上げられた尻肉が減多打ちされ、回避も防御もできず小さな痛みと大きな快感が蓄積させられる。  
さながらスパンキングじみた行為に牝の啼き声を上げさせられ、抵抗できない内に異形たちに囲まれる。  
いよいよ窮地に追い込まれ、エトワールは苦痛のせいか、それとも肉悦によるものか、涙を浮かべながら何とか立ち上がる。

(は……反撃……しないと……っ♡)  
「あ……♡ アンタら……♡ よくも……酷い目に遭わせてくれたね……っ♡ 覚悟しなさ」  
ひゅんっ！  
「ひやあっ?!」

震えながらも気丈に直立し、敵を睨む。そこまではいいものの、触手の一つが再び下半身に向けて伸びてきた途端、

気高さも凛々しさも捨てて悲鳴と共に全力で股間を防御する。  
閉じた脚の間に両手を挟み、更に前屈みになって秘部を守る所作。  
必死で健気、ゆえにいじらしく可愛らしい姿勢となったエトワール。  
そんな状態を見て異形たちは更に猛り、エトワールも股間を防ぐのに精いっぱい次への攻撃に対応できず、  
ついに四肢が触手に捕らえられてしまう。

「あっ！ くうっ……このくらいっ！」

抵抗不可能になるほど拘束される前に膂力で振りほどこうとするエトワール。だが――

—————  
ぎりいっ♡ びしっ♡ ばちいんっ♡  
「――っ?!♡ ひあっ♡ ああああっ♡」

次の瞬間には『既に』身体が思い切り仰け反っており、同時に打たれた覚えのない打撃感覚が胸と尻に伝えられる。

また時間が止められ、エトワールの身体を限界近くまで反り上げさせ、その上で別の触手が牝肉を打ったのだ。股間への攻撃……言わば『マン的』により発情したエトワールにはその攻撃も快樂責めとなり、不意にやってくる快感に敵前でまた身悶えする。快樂で感覚が蕩け、『力のプリキュア』を名乗っているにも関わらず膂力が一般人と同等かそれ以下にまで低下。そんなエトワールを触手は地面に叩き付けると、両足を持ち上げて逆さ吊りのような状態にさせる。

「あうっ♥ ちょっ、やめてっ！ アンタ、まさか……」

**ガガガガガッ♥**

「あぐっ♥ あ♥ あああああああつ♥♥」

逆さになり、脚も広げられて股間部が目立つようにされる。屈辱的な体勢に羞恥を感じるのも束の間、異形は自らの足裏をエトワールの股間部に乗せ、激しく震動させながら押し当てた。——『電気アンマ』。子供の遊び・悪ふざけの一つだが……今のエトワールにとって、これほど凶悪な責めもなかった。妖しい発情霧と触手スパンキングによって瞬く間に開発された、弱い打撃での快感。それを牝秘部に連打されるとなれば、肉体的な抵抗はもちろん、性欲を堪えることすら困難だ。本来ならば簡単に倒せるはずのザコ敵相手に、児戯によって苦悶するどころか絶頂近くまで追い詰められていく。

「ふっ♥♥ つく♥♥ あ♥♥ あああつ♥♥」

(ウソでしょっ♥♥ イキそうになってる……っ♥♥

いやっ♥♥ こんなので……イカされるなんてっ♥♥)

これ以上の恥を晒すことなど、気高いエトワールには耐えられない。反撃はできずとも、せめて性責めにだけは屈すまいと絶頂寸前で堪えて相手を睨み——

「っう♥♥ く……っ♥♥ いつまでも……ずっとそうしてればいいわ……♥♥

わたしは、こんなことで、負けない……っ♥♥ 絶対、諦めたりしな」

—————

**ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ♥♥**

「いっっひいいいいいっ♥♥♥ やめっ♥♥♥ あ♥♥♥ これダメっ♥♥♥

いやっ♥♥♥ あああああああああつっ♥♥♥」